拡張反復形の形態音韻派生

那須　昭夫

キーワード：オノマトペ，拡張反復形，単純反復形，接辞付加形，レベル順序づけ

要　旨

本稿では，反復構造の末尾に接尾辞を伴ったオノマトペ（拡張反復形）の形態音韻派生について考察する。拡張反復形は従来，「バタバタ」のような単純反復形の派生的亜種と解されてきた。しかし，その言語的振る舞いは，形態・音韻・統語の各側面にわたって単純反復形とは対極的な特徴を示す。本稿では拡張反復形が接尾辞を伴ったオノマトペをベースに派生される形態であることを主張し（バタン>バタバタン），その根拠となる言語事実を示す。加えて，拡張反復形の語形成とアクセント形成が「レベル順序づけ」のモデルを通じて適切に分析できることを論じる。

1. はじめに

日本語のオノマトペには，外見のよく似た二通りの反復形がある。(1a)は語幹の単純な繰り返しからなる単純反復形で，オノマトペ語彙の4割程度[*1]を占める。(1b)は語末に接尾辞（促音ないしは撥音）を含む語形で，本稿ではこちらを「拡張反復形」と呼ぶ[*2]。

(1) a. ピカピカ，キラキラ，ガタガタ，クルクル　　（単純反復形）
　　b. ピカピカッ，キラキラッ，ガタガタン，クルクルン　（拡張反復形）

単純反復形と拡張反復形は，従来，派生関係にある語形と考えられてきた（渡邊

*1　玉村（1989），角岡（2007）による。

*2　接尾辞の付加・多重反復・語末長母音化などを通じて語形が自在に拡張できることによる。

1952; 石垣 1965; 天沼 1974; 泉 1976; Waida 1984; 田守・スコウラップ 1999)。しかし，その外形上の類似性とは裏腹に，両者は音韻構造・形態派生・統語特性の三つの側面において，互いに対極的と言ってよいほど特徴の異なる語形である（那須 2001, 2002)。

本稿では，単純反復形と拡張反復形の特性の相違について改めて検討し，その形態音韻派生のプロセスが，那須（2015）の主張する派生規則の順序づけを通じて捉えられることを論じる。

第 2 節では，拡張反復形の組成をめぐる先行の分析を二つ取り上げ，それぞれの概略を振り返りつつ，本稿における課題を述べる。第 3 節では，拡張反復形の特性を形態・音韻・統語の各側面にわたって記述し，この語形が単純反復形とは全く異なる性質を備えていることを明らかにする。第 4 節では，拡張反復形と同様の特性が接尾辞を伴った語形（接辞付加形）にも観察されることを指摘し，拡張反復形と接辞付加形との間に派生関係が成り立っていることを明らかにする。この分析に基づき，第 5 節では，拡張反復形の形態派生ならびにアクセント形成のプロセスを，レベル順序づけ（level-ordering）のモデルに基づいて分析する。

2. 先行研究

2.1. 反復基体解釈

天沼（1974: 45）は，オノマトペの形態構造の網羅的な分類を試みる中で，拡張反復形の組成について次のように説明している。

> XYXY 型の末尾に，促音「ッ」，又は，はねる音「ン」を伴っているもの。
> （例）カラカラッ，ガラガラッ，キラキラッ，ギラギラッ，クルクルッ，グルグルッ，コロコロッ，ゴロゴロッ，サラサラッ，ニタニタッ，パラパラッ，ピリピリッ，ポタポタッ（XYXYt 型）
> カラカラン，ガラガラン，クルクルン，グルグルン，コロコロン，ゴロゴロン（XYXYn 型）
> これらは，いずれも，もとの XYXY 型のものの意味を強調しようという場合に使われる。

冒頭の一文および例示後の「もとの XYXY 型のもの」との記述からうかがえるように，天沼（1974）は拡張反復形を単純反復形からの派生形として位置づけている。

すなわち，派生のベース（基体）としてまず単純反復形 XYXY があり，その末尾に促音／撥音が加わることで拡張反復形が作られるとの解釈(2)である。これを便宜的に「反復基体解釈」と呼んでおこう。

(2) XY ＞ XY + XY ＞ XYXY + Af

この解釈は従来一般的であるようで，同様の見方を示した研究としては，ほかにも渡邊（1952），石垣（1965），泉（1976），Waida（1984），田守・スコウラップ（1999）などがある。渡邊(1952)は語形と象徴機能との関わりという観点から，Waida(1984)はオノマトペの派生要素の類型とその結合様式という観点から，拡張反復形を単純反復形の派生的亜種とみなしている。また田守・スコウラップ（1999: 30）は単純反復形の特性に触れる中で，「ころころっ，くるくるっ」などの拡張反復形について「語末に促音を含んだ異形」だと述べている。

2.2. 那須（2001）

一方，これとは別の分析を示した研究もある。那須（2001）は，日本語の反復オノマトペには反復辞が接尾辞の位置に現れるタイプと，接頭辞の位置に現れるタイプの二種類があるとする。単純反復形は前者に相当し，拡張反復形は後者に相当する。那須（2001）による語構造分析を引いて示すと次のようである。

(3) a.　単純反復形　[Stem + RED]
　　b.　拡張反復形　[RED + [Stem + Suffix]]

たとえば単純反復形「ピカピカ」は，語幹「ピカ」に対し反復辞（RED）が後接した派生構造(3a)を持つとされる。一方，拡張反復形「ピカピカッ」は，接尾辞のついた派生形「ピカッ」に対して反復辞が前接した派生構造(4b)を持つとされる[*3]。

この解釈を採るべき根拠として那須（2001）が指摘するのは，単純反復形と拡張

*3　村田（1993: 102）も拡張反復形の構造を X+[X+suffix]と記述している（X は「語基」）。しかし，反復要素を積極的に接頭辞と認める立場はとっていない。むしろ，拡張反復形の語構造について「この XX 型に接尾辞を付けた」形と述べているところからは，村田も反復基体解釈(2)を想定しているように見受けられる。

反復形との間に見られる形態的・音韻的な特徴の隔たりである。まず形態上の相違としては，反復回数に対する制限の違い(4)がある。

(4) a. *ピカピカピカ光る。
b. ピカピカピカッと光る。

単純反復形では繰り返しが一度しか起こらないのが特徴で，(4a)のような複数回の反復を伴うパターンは適格でない[*4]。これに対して拡張反復形では，(4b)の例に見るように複数回の反復（多重反復）を許す。

音韻特徴（アクセント）に関しても，単純反復形と拡張反復形は対極的な振る舞いを示す。単純反復形(5a)が語頭音節にアクセント核を含むのに対し，拡張反復形(5b)は語末音節にアクセント核を含む。

(5) a. ピ]カピカ，コ]ロコロ，ガ]タガタ，バ]タバタ，ヒ]ラヒラ
b. ピカピカ]ッ，コロコロ]ッ，ガタガタ]ッ，バタバタ]ッ，ヒラヒラ]ッ

これらの特徴の隔たりを根拠に，那須（2001）は，従来主流であった反復基体解釈に対して懐疑的な立場をとっている。単純反復形と拡張反復形は外形上互いによく似ていても，両者の間に派生上の類縁性はないとするのが那須（2001）の主張の骨子である。

2.3. 本稿の課題

上述の二通りの見方があることを踏まえ，本稿では，記述・理論の両面から拡張反復形の語形成について考察を加える。

まず記述的課題として，本稿前半では，那須（2001）で示された語形成解釈(3)

---

*4 単純反復形を用いたオノマトペ表現では，時として「ピカピカピカピカ光る」のような一見多重反復的なパターンが用いられることがある。しかし，このパターンは単純反復形「ピ]カピカ」全体を再度繰り返した語形と解される。これはアクセントの事実から確かめることができる。当該のパターンは「ピ]カピカピ]カピカ」という重起伏型のアクセントで実現されることはあっても，「*ピ]カピカピカピカ」のように語頭音節のみに核がある型では実現されない。

を支持する立場から，この解釈を補強する新たな証拠をいくつか示し，拡張反復形が単純反復形と全く異なる特性を備えた語形であることを論じる。また本稿後半では，拡張反復形の語形成過程について，那須（2015）の提案するレベル順序づけのモデルに基づいた分析を示す。

3. 拡張反復形の諸特性

3.1. 問題の所在

2.1 節で述べたように，拡張反復形は従来，単純反復形からの派生形として位置づけられてきた。たしかに(6)のように記述してみると，拡張反復形は単純反復形の末尾に接尾辞がつくことで形成される語形であるかのように見える。

(6) XYXY ＞ XYXY + Af
　ピカピカ ＞ ピカピカ＋ッ
　コロコロ ＞ コロコロ＋ッ
　バタバタ ＞ バタバタ＋ン
　クルクル ＞ クルクル＋ン

しかしながら，ここで注意すべきは，このような解釈が問題なく成り立つのは繰り返し部分が XYXY 型の構造を持つ場合（反復が 1 回に収まる場合）に限られるということである。拡張反復形の中には複数回の反復を伴う(7)のようなパターンもあり，このような語形では，(6)と同様の派生解釈を下すことには問題がある。

(7) ピカピカピカッ，コロコロコロッ，バタバタバタン，クルクルクルン

仮に，反復構造の末尾に接尾辞がつくことで拡張反復形が派生されるのだとすると，多重反復形(7)に関しては(8)のような派生構造を考えざるを得ない。ところが，この解釈では，接尾辞付加の基体となる形式*XYXYXY が適格な単純反復形としては実在しないという点が問題となる。

(8) *XYXYXY + Af
　*ピカピカピカ ＞ ピカピカピカッ
　*バタバタバタ ＞ バタバタバタン

単純反復の過程では「*ピ]カピカピカ（光る）」「*バ]タバタバタ（倒れる）」のような複数回の反復を伴う語形は起こらない。つまり，(8)の解釈は，実在しない不適格形から適格な実在形が派生されるとの想定を含んでいることになる。この想定が合理性に欠けるものであることは言うまでもない。

このことは同時に，拡張反復形を単純反復形の変種とみなす従来の解釈が妥当でないことも示唆している。両者は見かけの上では大変よく似ているものの，以下の各節で論じるように，その言語的特徴は互いに全く異なっている。

3.2. 多重反復

両者の径庭を示す事実として，最初に多重反復の可否を取り上げる。先に(4)および(7)で触れたように，単純反復形では反復回数が 1 回に限定されているのに対し，拡張反復形にはそのような制限はなく，論理的には無限回の反復が可能である。

(9) a. ピカピカッと光る　1
　　b. ピカピカピカッと光る　2
　　c. ピカピカピカピカッと光る　3
　　d. ピカピカピカ……ピカッと光る　*n*

各例の右側に記した数字は反復辞の数を示す。拡張反復形では，反復辞を一つだけ含む(9a)のパターンのみならず，反復辞をさらに累加した(9b)以下のパターン（多重反復形）も生成可能である[*5]。

多重反復形は，各種辞典の見出し項目として取り上げられる機会はほとんどないものの，オノマトペの形態法としてはむしろ生産的なパターンである。本稿で扱っている語形以外にも，たとえば「ピピピピッ，シュシュシュシュッ，ババババン，ドドドドン」といった語形や，「バサササッ，カサササッ，ズドドドン，クルルルン」のような部分反復型のオノマトペにおいて，多重反復はしばしば起こり得る。多重反復は，より口語性の高い臨時的な文脈での使用が目立つ形態法であり，反復辞を累加することによって，当該の動作・状態がより長く持続している様子を表象する。

一方で，反復辞の累加を許さない単純反復形は，きわめて定型性の高い語形であ

*5　この種の多重反復形は天沼（1974: 48-49）においても取り上げられている。

る。二つの 2 拍フットからなる均整の取れた韻律構造（$F_{\mu\mu}$+$F_{\mu\mu}$）を常に維持するのが特徴で，Poser（1990）がこれを“bipodic template”と呼ぶように，単純反復形はいわば決まりきった鋳型的な枠に拘束された語形であり，そこからはみ出すような拡張性は持たない。

3.3. 語末長母音化

前節で述べた事実は，拡張反復形が語形成の自由度の高い語形であることを示唆しているが，この点を裏づける事実はほかにもある。拡張反復形には，語末音節の母音を延ばすことによって形態上のバリエーションを作り出せるという特徴がある。

(10) ピカピカッ ＞ ピカピカーッ
　　フワフワッ ＞ フワフワーッ
　　ゴロゴロン ＞ ゴロゴローン
　　バタバタン ＞ バタバターン

こうした語末長母音含みの語形も，より派生的な形態であるがゆえに辞典の見出し項目にはなりにくいが，話しことばでのオノマトペ表現では頻繁に用いられる。

翻って，単純反復形では語末長母音化は起こらない。たとえば「ピ]カピカ（光った）」という単純反復形から「*ピ]カピカー（光った）」といった語末長母音含みのバリエーションが作られることはない。

3.4. アクセント

単純反復形と拡張反復形の特徴の違いは，そのアクセント構造にも見出せる。両者ではアクセント核の所在が鏡に映し出したかのように正反対である。単純反復形のアクセントが語頭型のパターンをとる一方で，拡張反復形は語末型のパターンをとる（秋永 2001: 63-64）。

(11) a. 単純反復形（語頭型）
　　ゴ]ロゴロ（と）
　　ド]キドキ（と）
　　ゴ]トゴト（と）
　　バ]タバタ（と）

b. 拡張反復形（語末型）
　　ゴロゴロ]ッ（と）
　　ドキドキ]ッ（と）
　　ゴトゴト]ン（と）
　　バタバタ]ン（と）

アクセント型の違いに対応する形で，韻律構造もまた互いに鏡像的なパターンをなしている（那須 2001）。アクセント核を含むフットを「主要部フット（F'）」と呼ぶと，単純反復形が主要部フットを語頭に含むのに対して（主要部始端型），拡張反復形では語末の位置に主要部フットが形成される（主要部末端型）。

(12) a. 単純反復形：#F' …
(go' ro)-goro
(do' ki)-doki
(go' to)-goto
(ba' ta)-bata

b. 拡張反復形：… F' #
goro-go (ro' Q)
doki-do (ki' Q)
goto-go (to' N)
bata-ba (ta' N)

金田一（1976）は，単純反復形の語頭型アクセント(11a)について，反復形を構成する二つの要素のうち前部要素のアクセント核が残存した型であるとの見方を示している。たとえば「キ]ラキラ」というアクセントは，「キ]ラキ]ラ」という重起伏構造から左側の核だけを残した型であるという（金田一 1976: 8）。構成素（前部要素）の語彙アクセントが反復形全体のアクセントとして継承されることから，単純反復形のアクセントには語彙依存的な性格が見いだせる。

一方，拡張反復形の語末型アクセント(11b)は，生産的な音韻規則を通じて形成されるパターンである。その規則の内実は，語末フットの左側構成素にアクセントを付与するという至極単純なものである。

(13) μ → μ' / (__μ)#

このアクセント規則は多重反復を伴うバリエーションにおいても働く。下に例示するように，拡張反復形のアクセント核は，たとえ反復辞がいくつ累加しようとも常に語末フットに所在する。

(14) … pi (ka' Q)#
ピカピカ]ッ
ピカピカピカ]ッ
ピカピカピカピカ]ッ
ピカピカピカ……ピカ]ッ

拡張反復形のアクセントは（多重反復形も含め）常に一定の規則に基づいて作られる性質があり，この点は語彙依存的な性格を持つ単純反復形のアクセント形成とは好対照である。

なお Hamano（1998: 32-34）は，単純反復形であれ拡張反復形であれ，あるいはこれら以外のいかなるオノマトペであれ，そのアクセントはおしなべて次の規則を通じて作られるとの分析を示している[*6]。

(15) [A]ssign an accent on the leftmost of the "strongest" feet.　(Hamano 1998: 33)

この分析に従えば，アクセント形成の方略において単純反復形と拡張反復形との間に差異はないことになる。しかし，(15)の規則には，「バッタン」のような重音節＋重音節からなる語形について，「*バ]ッタン」という誤ったアクセントを予測してしまうという重大な欠陥がある。簡潔な規則を通じて多岐にわたるパターンを一律に説明するというのは理論分析の目的とするところではあるが，言語事実の中に明らかな反例がある以上，Hamano（1998）の分析(15)には首肯しがたい。むしろ，ここでは記述的事実を尊重し，単純反復形と拡張反復形とではアクセント形成の方略に違いがあると捉えておくほうが，性急な一般化を避けるという意味でも慎重な判断であろう。

3.5. 統語上の振る舞い

統語的側面に現れる振る舞いにおいても，単純反復形と拡張反復形は性格を異にする。反復オノマトペが様態副詞として用いられる時には助詞「と」が共起するが，その義務性は反復形のタイプにより異なる。(16)に示すように，単純反復形が「と」を伴わないまま述部を修飾することができる一方で（田守 1991），拡張反復形には必ず「と」が共起しなければならない。つまり「と」は単純反復形において随意的要素であるのに対し，拡張反復形では義務的要素である。

---

*6　この規則における "strongest feet" とは，フットに強度の階層があるとの Hamano（1998）の見解を反映した記述である。重音節からなるフットが最も強く，次いで二つの軽音節からなるフットが続き，一つの軽音節からなるフットは最も弱いとされる。

(16) a. 単純反復形

キラキラ｛と／ø｝輝く。
バラバラ｛と／ø｝崩れる。
クルクル｛と／ø｝回る。
バタバタ｛と／ø｝倒れる。

b. 拡張反復形（語末型）

キラキラッ｛と／*ø｝輝く。
バラバラッ｛と／*ø｝崩れる。
クルクルン｛と／*ø｝回る。
バタバタン｛と／*ø｝倒れる。

両者の統語特性の違いを示す別の言語事実としては，動詞組み入れの可否がある。単純反復形のうち一部のものは，「バタバタする，ドキドキする，ゴソゴソする，クヨクヨする」のように，サ変動詞の語幹としても機能できる（田守 1991: 49-52）[*7]。他方，拡張反復形ではこうした用法は起こらない。「*バタバタッする，*ドキドキンする」のような，拡張反復形を動詞語幹に直接転化した形式はあからさまに不自然である。

これらの事実は，単純反復形と拡張反復形との間に「語彙化」の程度の差があることを示唆している。「語彙化」とは，田守（1991: 118）によれば，「本来動物の鳴き声や人間の声を模写したり，自然界の物音を模倣したりしてつくられた」オノマトペが，「一般語彙と同じように，次第に文中で用いられるように」転化する過程をいう。換言すると，一般語に比べて意味の具象性が高く恣意性とは反対の極にあったオノマトペが，しだいに一般語と同様の用法を伴って文法化・抽象化されてゆく段階とも言い得る。田守（1991）および筧（1993）は，オノマトペの「語彙化」の進行度を測るうえで，「と」の随意性ならびに動詞組み入れ（サ変動詞化）を有効な指標の一つと見ている。そのうえで，田守（1991: 117）は次のように述べている。

> 「と」を随意的に伴うオノマトペと，「と」を義務的に伴うオノマトペでは，動詞組み入れに関して，異なった特徴を呈する。すなわち，前者ではその音韻形態に関係なく，全て動詞組み入れが可能であり，動詞に組み入れられた場合「と」が伴わない。一方後者は，その音韻形態によって，動詞組み入れ可能なものとそうでないものがあり，動詞に組み入れられた場合でも「と」が伴わなければならない。この両者の相違は，両者の語彙性の程度の差を示唆している。

---

*7 この場合，「??バタバタとする，??ドキドキとする，??ゴソゴソとする，??クヨクヨとする」のような，「と」を含む表現がむしろ自然でないこともある（田守 1991: 112-115）。

すなわち，前者は「と」の助けを借りずに単独で機能しているのに対し，後者は「と」の助けを借りることなしには，単独で機能できない。このことから，前者のオノマトペ[ママ]が自立した語彙性の高い語であるが，後者のオノマトペ[ママ]が自立していない，語彙性の低い語であるということが窺える。

ここで言う「『と』を随意的に伴うオノマトペ」あるいは「前者」には，単純反復形が相当する。また，拡張反復形は，「『と』を義務的に伴うオノマトペ」あるいは「後者」に相当する[*8]。上述の田守（1991）の説明に沿うと，単純反復形がそれ自体安定した語としてかなりの程度に語彙化されているのに対し，拡張反復形は「と」による支えを常に必要とする点で，語彙化の程度の低い形態ということになる[*9]。

4. 拡張反復形の基体

4.1. 似て非なる語形

前節で検討した単純反復形と拡張反復形の特性の違いをまとめたのが，次に示す表1である。単純反復形と拡張反復形は一見したところ互いによく似た語形であるが，それはあくまでも見かけ上の類似に過ぎない。見た目のあり方とは裏腹に，両者は形態・音韻・統語の各側面にわたって全く対極的な特性を備えている。いわば両者は似て非なる語形なのである。

表1 単純反復形と拡張反復形

	単純反復形	拡張反復形
多重反復	－	＋
語末長母音化	－	＋
アクセントの位置	語頭フット	語末フット
韻律構造	主要部始端型	主要部末端型
「と」の義務性	－	＋
動詞組み入れ	＋	－

*8　ただし，田守（1991）の記述では拡張反復形に関する直接の言及はなされていない。

*9　これに類する観察は渡邊（1952）でも示されている。渡邊は「象徴辞」を「第一類」と「第二類」とに分け，前者は「『と』を外した裸の形では，機能以前・品詞以前の，内容きりの言葉」であり，後者は「『と』を外した裸のままでも連用修飾語となり得る」語であるとする。

この点を踏まえると，2.1 節で見た反復基体解釈が拡張反復形の語形成を説明するうえで妥当な解釈でないことは明らかである。拡張反復形の組成を「ピカピカ＋ッ，バタバタ＋ン」のような「反復＋接尾辞」からなる構造として見る分析は，形態の外見に現れる単純反復形との示差性（接尾辞の有無）を記述したものではあっても，拡張反復形の語形成のしくみを説明し得るものではない。

4.2. 接辞付加形との共通性

一方，ここで注目すべき事実として指摘しておきたいのは，拡張反復形に観察されたものと全く同様の特徴が，反復構造を伴わない次の一群のオノマトペにも見いだせるという事実である。

(17) ピカッ，フワッ，バサッ，バタン，ゴロン，ガシャン

これらの形態の末尾に含まれる促音・撥音は接尾辞と解釈できることから（石垣 1965; 泉 1976; 南部 1992），以下，(17)のオノマトペを「接辞付加形」と呼ぶ。接辞付加形は反復操作とは無縁の形態だが，それにもかかわらず，以下の諸点において拡張反復形と同様の特徴を示す。

第一に，接辞付加形にも語末長母音化を伴うバリエーション(18)があることが指摘できる。

(18) ピカッ ＞ ピカーッ
フワッ ＞ フワーッ
バサッ ＞ バサーッ
バタン ＞ バターン
ゴロン ＞ ゴローン
ガシャン ＞ ガシャーン

この事実は，接辞付加形も語形成の自由度の高さという点で拡張反復形と特徴を共有していることを物語る。

第二に，アクセント構造に関しても，接辞付加形は拡張反復形と共通の特徴を備えている。(19)に示すように，接辞付加形では語末音節にアクセントが置かれるのが特徴である（秋永 2001: 62-63）。

(19) ピカッ（と）　pi (ka' Q)
フワッ（と）　hu (wa' Q)
バサッ（と）　ba (sa' Q)
バタン（と）　ba (ta' N)
ゴロン（と）　go (ro' N)
ガシャン（と）　ga (sya' N)

アクセントを含むフット（主要部フット）が語末位置に形成される点で，接辞付加形のアクセントは拡張反復形のアクセント(11b)と同様の構造を備えている。

第三に，統語特性の共通性も指摘できる。拡張反復形と同様，接辞付加形も文中で用いられる時には必ず助詞「と」が共起する。

(20) ピカッ｛と／*ø｝光る。
フワッ｛と／*ø｝舞い上がる。
バサッ｛と／*ø｝降りかかる。
バタン｛と／*ø｝倒れる。
ゴロン｛と／*ø｝転がる。
ガシャン｛と／*ø｝割れる。

田守・スコウラップ（1999: 190）は，助詞「と」の義務的付加は当該のオノマトペの語彙性の低さと関わりがあるとし，「と」を義務的に必要とする諸語形について次のように述べている。(引用中の下線・波線は本稿筆者)

> CV, CVQ, CVN, CVCVQ, CVCVN, CVCV, CVCVri, CVNCV, CVQCV のような様態副詞として機能する典型的でない形態，および自然界の音を描写するのに用いられるすべての臨時語に対しては「と」の付加が義務的である。さらに，「ぱらぱらっ」のような語末に促音を持つ，2 モーラ反復形の様態副詞的なオノマトペの異形にとっても，「と」の付加は義務的である。

下線を付した「CVCVQ, CVCVN」は本稿でいう接辞付加形に，波線部で言及されている形態は拡張反復形にそれぞれ当たる。上の記述は，「と」を義務的に必要とするという点において両者が共通の特性を持つとの観察を示したものにほかならない。

4.3. 拡張反復形の語形成

以上指摘したとおり，拡張反復形と接辞付加形との間には，形態・音韻・統語の各側面にわたって軌を一にした振る舞いが見いだせる。こうした特徴の一致は，接辞付加形と拡張反復形が形態派生上類縁関係にあることを示唆して余りある。

表 2 拡張反復形と接辞付加形

	拡張反復形	接辞付加形
語末長母音化	＋	＋
アクセントの位置	語末フット	語末フット
韻律構造	主要部始端型	主要部末端型
「と」の義務性	＋	＋

繰り返し構造を含む拡張反復形が，同じく繰り返し構造からなる単純反復形とではなく，むしろ反復を伴わない接辞付加形と共通の特性を有しているというのは，一見したところ意外なことのように思われる。しかし，次のような形で語形を配列してみると，両者の距離の近さが鮮明に浮かび上がってくる（那須 2002: 29）。

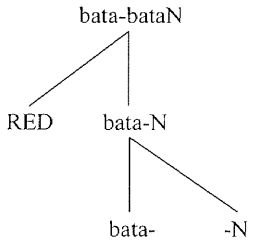
(21) a. バタ]ン　0
　　b. バタバタ]ン　1
　　c. バタバタバタ]ン　2
　　d. バタバタバタバタ]ン　3

(21a)は接辞付加形であり，(21b-d)は拡張反復形およびその多重反復形である。語例の右側の数字は反復の回数を示しているが，(21a)から順に下るに従ってその数が増えていくことからうかがえるように，上の諸形態の間には反復の増殖過程とも言うべき一続きの関係が成り立っている。また，反復の累加によって語形がいかに拡張しようとも，下線を付した部分の構造はアクセントの位置も含め常に一定していて変化がない。この下線を付した部分こそはとりもなおさず接辞付加形にほかならないことから，拡張反復形とはすなわち，接辞付加形をベースとして派生される形態であることが分かる。

上述の観察は，2.2 節で述べた那須（2001）による派生解釈(3b)を支持する。拡張反復形は，外見こそ単純反復形に酷似しているものの，その言語的振る舞いは接辞付加形のそれと軌を一にしていることから，本質的には接辞付加形からの派生形

るべきである。その派生構造は次の階層図で表すことができる。

2）バタバタン



この階層図は，派生の第一段階としてまず接辞付加形「バタ-ン」が派生され，続いてその語根部分「バタ」が反復辞として複写されることで，拡張反復形「バタ-バタン」が作られることを示している。

5. レベル順序づけ

5.1. 派生規則とその組成

前節までの考察を踏まえて，ここでは拡張反復形の形態音韻派生のプロセスを「レベル順序づけ（level-ordering）」のモデルを通じて捉える。那須（2015）は，オノマトペの接尾辞と反復辞の間に，次のような派生上の順序づけが成り立っていることを明らかにしている。

(23) a. Level *i*：接尾辞付加規則＋アクセント付与規則
　　b. Level *j*：反復辞付加規則

レキシコンにおいて，接尾辞と反復辞はそれぞれ一次的な派生レベル（Level *i*）と二次的な派生レベル（Level *j*）とに分属しており，前者が後者に先駆けて語形成を起こす関係にある。つまりオノマトペでは接尾辞付加による派生が先行し，反復派生はこれに続く段階で生じるとするのが那須（2015）の分析である。また，Level *i* の段階にはアクセント付与規則も含まれる。この規則は，語末に形成されるフットの主要部にアクセントを与える働きを持っており，その式型は本稿でもすでに(13)に示した。

上の順序づけ(23)の根拠の一つとして那須（2015）が指摘するのは，接辞付加形と単純反復形のアクセント構造の対極性である。下に示すように，接辞付加形が語末型のアクセントを持つのに対し，単純反復形は語頭型のアクセントを持つ。

(24) a. 接辞付加形（語末型）
ゴロ]ッ（と）
ドキ]ッ（と）
ゴト]ン（と）
バタ]ン（と）

b. 単純反復形（語頭型）
ゴ]ロゴロ（と）
ド]キドキ（と）
ゴ]トゴト（と）
バ]タバタ（と）

この振る舞いの違いは，アクセント規則(13)が接辞付加形に対しては適用される一方で，単純反復形には適用されないことを示唆している。換言すると，アクセント規則(13)は反復派生に先駆けて適用されることになる。(23)の順序づけに基づくと，この様子は次のように分析できる（那須 2015）。

(25) バタ]ン ／ バ]タバタ

		(a)	(b)
入　力		bata-	bata-
Level *i*	接尾辞付加	bata + N	———
	アク規則(13)	ba（ta' N)#	(ba' ta)#
Level *j*	反復辞付加	———	ba' ta + RED
出　力		bata' N	ba' ta-bata

まず接辞付加形(25a)では，Level *i* において接尾辞付加規則が働き，派生形「バタン」に対してアクセント付与規則(13)が適用される。この場合，語末フットにあたるのは「タン」であり，その主要部である「タ」に核が付与されることで「バタ]ン」という語末型のアクセントが形成される。一方，単純反復形(25b)の派生過程では，Level *i* での形態規則（接尾辞付加）は作用しない。このためアクセント付与規則(13)は入力形式「バタ」に対して直接作用する。「バタ」はそれ自体 2 拍フットを構成するので，その主要部「バ」に核が付与され，「バ]タ」という中間派生形が作られる。反復が生じるのはその次の段階，すなわち Level *j* においてである。ただし，アクセント付与規則(13)はすでに Level *i* において適用済みであるので，

Level *j* で反復派生が生じてもアクセントには変化が起こらない。(24)に示したアクセント型の違いは，(23)の順序づけが保証されていることによって適切に説明される。

5.2. 拡張反復形の派生

(23)の順序づけは，拡張反復形の形態音韻派生についても合理的な分析を与えることができる。拡張反復形では接尾辞と反復辞がともに派生に参与する点が特徴だが，これら二つの派生要素の間には一定の順序づけが成り立っている。すでに 4.2 節および 4.3 節での検討を通じて明らかにしたように，拡張反復形は接辞付加形をベースとして派生される形態である。このことは，一連の派生過程において，反復に先駆けて接尾辞付加が生じることを意味している。その派生の様子を示したのが(26)である。

(26) バタ]ン ／ バ]タバタ

		(a)
入　力		bata-
Level *i*	接尾辞付加	bata + N
	アク規則(13)	ba (ta' N)#
Level *j*	反復辞付加	RED + bata' N
出　力		bata' N

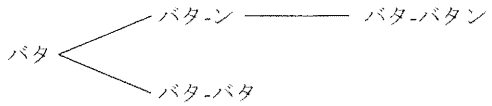
拡張反復形の派生過程では，まず Level *i* において接尾辞の付加が起こり，次いで Level *j* での反復派生が続くという順序づけで語形成が起こる。アクセント付与規則(13)は Level *i* でのみ適用され，続く Level *j* では適用されない。この順序づけがあることにより，接辞付加形と同様の語末型アクセントが接辞付加形でも起こるという事実を説明することができる。

上の一連の派生過程において，接辞付加形と拡張反復形の形態派生上の類縁性(21)を捉えるうえで重要なのは，反復辞付加規則の位置づけである。(25a)と(26)の対比を通じて分かるとおり，接辞付加形ではこの規則は働かないが，拡張反復形では働いている。すなわち，Level *i* での派生を終えた時点で出力されるのが接辞付加形であり，これにさらに Level *j* での派生も加わったパターンが拡張反復形ということになる。Level *j* での反復辞付加はいわばオプションであり，その適否は選択的な性格を持つ。

6. おわりに

本稿では，外見のよく似た二通りの反復オノマトペを取り上げ，互いの言語的特徴の違いを根拠に，両者の間に派生関係を認める従来の分析（反復基体解釈）が適切でないことを論じた。拡張反復形は単純反復形からの派生的亜種なのではなく，接辞付加形をベースとして作られる形態である。本稿で取り上げた三つの形態の派生関係をまとめると次のように図示できる。

(27)



ともに反復を伴う語形であっても，単純反復形「バタバタ」と拡張反復形「バタバタン」は，形態派生の初期段階ですでに袂を分かった形態である。両者から感じられる類似性は，あくまでも出力形にたまたま認められる外見上の共通性（反復を含むということ）を捉えたものに過ぎない。

本稿後半では，順序づけられた規則の体系(23)により，上述の関係が一律に捉えられることを明らかにした。(27)に示した接辞付加形・単純反復形・拡張反復形の関係は，一連の派生過程に含まれる二つの形態規則（接尾辞付加規則・反復規則）の適否を基準として次のようにまとめることができる。

表 3 語形と形態規則

	接辞付加形 (バタン)	単純反復形 (バタバタ)	拡張反復形 (バタバタン)
接尾辞付加規則	＋	－	＋
反復辞付加規則	－	＋	＋

まず，接辞付加形と単純反復形は離接的関係にある。すなわち，接尾辞付加規則および反復辞付加規則はそれぞれの語形において排他的に適用される。一方，接辞付加形と拡張反復形は連接的関係にある。接尾辞付加規則だけが適用されれば接辞付加形の出力が得られ，これに反復派生が加われば拡張反復形の出力が得られる。この連接関係は，(21)に示した分析の意図するところとも整合する。

本稿で分析の基盤としたレベル順序づけの考え方は，理論研究史の流れに照らせば率直なところ古めかしいモデルであるかもしれない。しかし，オノマトペの形態音韻派生に関する記述的事実を捉えるうえでは有効なモデルである。本稿では，従来見逃されがちであった単純反復形と拡張反復形の特性の乖離を記述することに考察の重点を置き，あえて旧来のモデルを援用することで，拡張反復形の形態派生上の由来を記述的事実に基づいて明らかにすることを目指した。

ただし，形態と音韻の相互作用を伴う種々の言語現象が，最適性理論をはじめとする現今の理論的枠組みにおいても依然重要な分析課題として関心を集めていることは言うまでもない。オノマトペの形態音韻派生をめぐって本稿で明らかにした諸特性が，そもそも派生という概念自体を説明装置から排除した最適性理論においてどのように分析され得るのかという点については，今後も探究を続けるべき課題である。

付記　本稿は，科学研究費（基盤研究(C), 26370437）による助成を受けた研究の成果の一部をまとめたものである。

参考文献

秋永一枝（2001）「東京アクセントの習得法則」秋永一枝編『新明解日本語アクセント辞典』東京: 三省堂, 10-106.

天沼　寧（1974）「擬音語・擬態語について」天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』東京: 東京堂出版, 3-62.

石垣幸雄（1965）「擬声語・擬態語の語構成と語形変化」『言語生活』171: 30-36.

泉　邦寿（1976）「擬音語・擬態語の特質」鈴木孝夫編『日本語の語彙と表現（日本語講座 4)』東京: 大修館書店, 105-151.

筧　壽雄（1993）「一般語彙となったオノマトペ」『言語』22(6): 38-45.

角岡賢一（2007）『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』東京: くろしお出版.

金田一春彦（1976）「連濁の解」*Sophia Linguistica* 2: 1-22.

玉村文郎（1989）「語形」玉村文郎編『日本語の語彙・意味（上）（講座日本語と日

本語教育 6)』東京: 明治書院, 23-51.
田守育啓 (1991)『日本語オノマトペの研究 (神戸商科大学研究叢書 XL)』神戸: 神戸商科大学経済研究所.
田守育啓・ローレンス・スコウラップ (1999)『オノマトペ ー形態と意味ー』東京: くろしお出版.
那須昭夫 (2001)「重複形オノマトペの韻律構造」『大阪外国語大学論集』25: 115-125.
那須昭夫 (2002)「日本語オノマトペの語形成と韻律構造」博士学位論文. (筑波大学)
那須昭夫 (2015)「オノマトペの語形成とレベル順序づけ」『日本語と日本文学』58: 41-62. (筑波大学日本語日本文学会)
南部忠明 (1992)「オノマトペの構造 ー形態と意味ー」田島毓堂・丹羽一彌編『日本語論究 3 現代日本語の研究』大阪: 和泉書院, 237-289.
村田忠男 (1993)「日英語の AB 型オノマトペ・重複形・等位構造表現の関係」筧壽雄・田守育啓編『オノマトピア ー擬音・擬態語の楽園ー』東京: 勁草書房, 101-125.
渡邊 實 (1952)「象徴辞と自立語 ー音と意味 (一) ー」『国語国文』21 (8): 37-54.
Hamano, Shoko (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Stanford, Calif.: CSLI Publications and Tokyo: Kurosio.
Poser, William J. (1990) Evidence for Foot Structure in Japanese. *Language* 66: 78-105.
Waida, Toshiko (1984) English and Japanese Onomatopoeic Structures.『女子大文学 (外国文学篇)』36: 55-79.

なす あきお／人文社会科学研究科
(2015 年 10 月 31 日 受理)